

『山月記』の語り手を読む可能性

——物語行為の教材価値——

仁野平 智 明

1. はじめに

『山月記』が教材として高等学校教科書に採られてから、60年を経た^①。定番教材として採録され続けながらも、その取扱い方は、「主人公李徴の人生観とはどのようなものか」「袁愴の感じる李徴の詩に欠けるところとは何か」「作者の意図は何か」「人が虎になるという虚構の意味を考える」といった類のものであり、その教材観にはほとんど変化が見られないのが実状である^②。このことの示す問題性は何か。まず第一には、『山月記』の教材価値とされているものの大半が、物語内容に即する観点に傾いているということである。そして第二に、そうした物語内容に関する読みに妥当性を与える材料として、生身の作者の存在が過度に強調されているということである。教科書の中には、作者中島敦の生涯や執筆に関するエピソード、中島敦の他作品に示された登場人物の人生観などを紹介し、それらを『山月記』に関連づけるコラムを載せているものもある。これらの文章を読むことで、学習者はテキストと存分に向き合うことをしないままに、コラムの内容に誘導された読み方をし、李徴＝作者として読むことがあたかも正解であるかのようにとらえてしまう。実作者である中島敦のエピソードや、そのコラムの執筆者の解釈を、物語内容に関する読みの傍証にしてしまうのだ。李徴＝作者として何らの疑いをもたないところに、物語行為への着眼の欠如が如実に表れている。

そもそも、物語内容と物語行為とは、文学作品の教材価値を考えるうえでともに欠かせない存在である。物語内容に終始してしまえば、作中の出来事や心情などを概念として抽出した読み方となり、テキストの言葉そのものが置き去りになってしまう。そうした中、物語行為を読むことは、物語内容に拘泥して硬直化してしまった教材研究に新たな視座を与えるものとして迎えられる^③。

本論においては、まず『山月記』における語りをめぐる議論より、従来提示されてきた語り手像を整理する。次に、登場人物の語りの中に挿入された三箇所（ ）部分を取り上げることで、語りの構造の解析を試みるとともに、語り手による袁愴像の造形の考察を併せて、物語行為に根ざした読みによって見出される『山月記』の新たな教材価値を明らかにすることを目的とするものである。

2. 語り手をめぐる議論

『山月記』の終盤に、次のような部分がある。

本当は、先づ、此の事の方を先にお願ひすべきだつたのだ、己が人間だつたなら。飢ゑ凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業の方を気にかけてゐる様な男だから、こんな獣に身を墮すのだ。

さうして、附加へて言ふことに、袁儻が嶺南からの帰途には決して此の途を通らないで欲しい、其の時には自分が酔つていて故人を認めずに襲ひかかるかも知れないから。又、今別れてから、前方百歩の所にある、あの丘に上つたら、此方を振りかへつて見て貰ひ度い。自分は今の姿をもう一度お目に掛けよう。勇に誇らうとしてではない。我が醜惡な姿を示して、以て、再び此處を過ぎて自分に会はうとの気持を君に起させない為であると。

田中実氏は、「さうして、附加へて言ふことに」以降、地の文と李徴の告白とが連続して二つの文脈が一つになっているとし、また、「君に起させない為であると。」の「と」を、「〈語り手〉の〈語り〉が李徴の告白にほとんど一体化していく効果を齎している」ものと指摘する⁽⁴⁾。それをふまえて、「〈語り手〉自体が自立的な〈語り手〉ではなかった」としたうえで、次のように述べる。

この小説の〈語り手〉とは、登場人物李徴に対する超越的視点がなく、逆に李徴という強烈な登場人物に吸収されているのである。つまり、『山月記』の〈語り手〉とは作中人物（主人公）に同化される〈語り手〉であると言えよう。李徴の告白の強さは〈語り手〉を吸収し、告白の文が〈語り手〉の文から相対化されることを弱め、この小説の内実を情感の高まりの中で歌いあげる格調高い一人称の〈語り手〉の物語に化してしまつたのである。

丹藤博文氏も「〈語り手〉が主人公の告白に吸収・同化されていく以上、〈語り手〉による主人公の相対化の視点は欠落する。そこでは、〈語り手〉と主人公あるいは登場人物同志の対話や批評の力は弱められ」として田中説を肯定し、「物語内容を相対化する自律的な三人称の位相をとりながらも、やがては主人公の告白に吸収され同化する」語り手を読む⁽⁵⁾。このように田中氏の説を支持し、概ね肯定する立場の論は多い⁽⁶⁾。

渥美孝子氏は、田中氏とは対照的なとらえ方をする前田角藏氏の「袁儻の体験談を袁儻に即して語るという方法」のため袁儻は「李徴の〈語り〉に対して単なる聞き手としてではなく、必然的に〈主体性〉を保持した聞き手、すなわち批評的な聞き手となる⁽⁷⁾」という見解と、先の田中氏の見解とをふまえ、「『山月記』はこの二氏の指摘がともに成立し得るような言説の編成を取っている」とし、次のように述べる。

李徴の自己像を相対化するのが、袁儻とその一行という存在である。先にも触れたように、〈語り手〉は袁儻との出会い以降は、李徴の「最も親しい友」袁儻に身を沿わせ、李徴の声に耳をそばだてる聞き手の位置に身を置くことになる。それに伴って、李徴を敗残者と見なすかのような冷やかな語り口は影を潜める。〈語り手〉は、一行が李徴の声に「息をのんで」聞き入り、李徴の即席の詩が披露されると「肅然として、この詩人の薄倖を嘆じた」（傍点引用者）と、李徴の言葉の感化力を保証する。その一方で、李徴の語りに全面的に取り込まれることのない袁儻の心内話を書き記し、これを相対化するのである⁽⁸⁾。

これらの見解に対し松本修氏は、先の田中氏の指摘を「話法の問題」として、三谷邦明氏の、

自由間接言説によって語り手と袁儂が同化しているという指摘⁹⁰と合わせて検討し、『山月記』の語り手について次のように述べる。

「山月記」の語り手は、テキストを通じて、物語内容から超越した語り手であり、複数の人物の心の中を覗く語り手であると判断できる。それは以下の理由による。

「山月記」の語り手は作中人物をすべて李徴ないし袁儂といった氏名ないしその代名詞としての「彼」で呼ぶ。物語内容からは超越したいわゆる物語的視点に立つ語り手、超越的な語り手である。そしてこの語り手は、以下のごとく、李徴、袁儂あるいは供の人々の心を覗くことのできるまさに超越的な語り手である。(中略)物語の大部分において、語り手はむしろ袁儂に寄り添っていると見ることができる。三谷の指摘はこのことと対応している。だが、以上の引用でも、「(非常に微妙な點に於て)」「袁儂は昔の青年李徴の自嘲癖を思出しながら、哀しく聞いてゐた。」というように、二カ所にわたる「()」の使用があり、作中人物に同化しない、物語の統御者としての独立した語り手の位置が強く示されている。(中略)袁儂の心理を覗き込みつつも、「次の様に感じてゐた」「、と」という、前後双方からの引用表示が施されており、語り手の独立が示されている。語り手の人格を感じさせるような情報はないが、語り手の独立性の強い、まさに物語的な語り口であると言える⁹¹。

このように、「作中人物に同化しない、物語の統御者としての独立した語り手」であるとしたうえで、さらに語り手と読者の関係性について、次のように言及する。

ただ、もちろん、袁儂の知覚と語り手との距離を読み手がどう感じるかによって、判断が割れることは考えられる。テキスト後半においては、語り手の知覚はかなり袁儂に寄り添った位置を起点として提示されており、この視点の置き方の寄り添いの程度は読者の判断に委ねられる性質があるからだ。(中略)「山月記」の語り手をめぐる近年の議論はむしろこの読者との関係の把握をめぐるものであったと捉えることができる⁹²。

渥美氏の「『山月記』はこの二氏の指摘がともに成立し得るような言説の編成を取っている」という見解は、『山月記』の教材価値を考えるうえで語り手への着眼が必要であることを示した点において大きな意味をもつ。そして松本氏の「『山月記』の語り手をめぐる近年の議論はむしろこの読者との関係の把握をめぐるものであった⁹³」という言葉は、『山月記』における語り手の位置の把握こそが、読みの多様性をもたらす源泉であることを示すものだといえる。

それでは『山月記』の語り手は、「作中人物(主人公)に同化され」(田中氏)て「主人公の相対化の視点は欠落」(丹藤氏)した存在、もしくは「袁儂に身を沿わせ」ながらも「李徴の語り」に全面的に取り込まれることのない袁儂の心内話を書き記し、これを相対化する」存在(渥美氏)、または「テキストを通じて、物語内容から超越した」「物語の統御者としての独立した」(松本氏)存在の、いずれかとして読まれるものなのか。それとも、これら以外にも読める可能性をもった存在なのか。次節では、『山月記』において語り手を読むさらなる可能性と、そうした読みの成立する所以とを具体的に考察する。

3. 能動的で人格的な語り手

『山月記』において、語り手による語り与李徴の語りは基本的には段落によって区分されており、分量の多寡は変化するものの語り手与李徴とが交互に語りながら物語は展開する。その中にある三箇所（ ）で括られた部分に注目したい。形態上からいえば、（ ）内の言葉は前後の文脈とは語りの位相を異にするものだ。そうでなければ（ ）で括る必要はないだろう。挿入句であるという異質さを（ ）の記号により視覚的に指し示す、いわば目立つ表記であるこれらの箇所が、だれの言葉であり、なぜその部分に挿入されたのかを検討し、その契機を与えられた必然性について考えることは、『山月記』の語り手を把握する重要な鍵になると思われる。ところが、これまでの『山月記』の教材研究において、この三箇所の部分は、語りの主体が何者であるかを不問のままに、補足説明の示された部分という程度に軽く扱われてきたのではないかと。以下、それらの三箇所について具体的に検証する。

① (非常に微妙な點に於て)

この（ ）部分について田中氏は、「袁愴のあの『何處か（非常に微妙な點に於て）欠ける所云々』という〈ことば〉もまた外部化されることなく、内なる〈ことば〉のままに終わり、批評として生きなかつたのである⁽¹³⁾」と述べ、袁愴の心中の言葉ととらえる。丹藤氏もまた、「袁愴の李徴の詩に対して抱いた『どこか（非常に微妙な点において）欠けるところがあるのではないか』という感想」として、田中氏と同様の見解を示している⁽¹⁴⁾。これに対し松本氏は、この（ ）部分及び「(袁愴は昔の青年李徴の自嘲癖を思出しながら、哀しく聞いてゐた。)」という箇所を、（ ）という符号の使用を根拠にして語り手の言葉とし、「作中人物に同化しない、物語の統御者としての独立した語り手の位置が強く示されている⁽¹⁵⁾。」とする。

まず、形態面に注目して、この「(非常に微妙な點に於て)」がだれの言葉であるととらえるべきか考える。「袁愴は感嘆しながらも漠然と次の様に感じてゐた。」(傍点引用者)とあり、その後「成程、作者の素質が第一流に……欠ける所があるのではないかと。」と続き、その最後に「と。」という引用表示がある。したがって、「次の様に」に該当する部分は先の「成程」以降の引用部分であり、それは袁愴の心中の言葉ということになる。しかし、だからといって、間に挟まれた（ ）内についても同様に袁愴の言葉であると無条件に見なすことはできない。もし、その部分もまた袁愴の言葉であるならば、「何處か非常に微妙な點に於て欠ける所があるのではないかと。」という一文に収めてひと続きの表現とした方が、形態としてはむしろ自然である。よって、この「(非常に微妙な點に於て)」は語り手自身の言葉と見なすのが適切であろうと考えられる。

次に、語られる内容の位相から考える。袁愴は、李徴の詩に「何處か」「欠ける所があるのではないかと」「感じてゐた」とあるが、李徴の朗詠した詩作品の「何處か」でしかなく、その対象を特定することができない点で、非限定的であるといえる。この非限定性は、「袁愴は感嘆しながらも、漠然と次の様に感じてゐた」(傍点引用者)とあるように、「漠然と」という感覚的な把握として示されていることと呼応する。これに対し、語り手が挿入した「(非常に微妙な點に於て)」

という言葉は、「缺ける所」があるという観点については袁愔に同意しながらも、それを「點に於て」と指摘したことで明らかな限定性を備えている。この限定性と非限定性という点において、両者の位相は異なりを見せている。こうした位相の差異が、従来の解釈においては見逃されてきたのではないか。作中人物である袁愔にはとらえられていない李徴の詩の「缺ける所」を、語り手が認識したうえでそれを主張しているとすれば、詩の理解について袁愔に対する自らの優位性を示すことになり、袁愔に対する語り手の態度は批評的であるとも読める。

「漠然と」「何處か」「缺ける所があるのではないか」と「感じてみた」という、語り手による袁愔の感慨の描写と、それに対する語り手自らの「非常に微妙な點」という限定的指摘は、物語内容的には李徴に対してより批評的でありながら、物語行為における対立構造上、袁愔に対しても批評的である。このように、独自の批評的観点のもとに解説を加えることで自己を主張する語り手の能動的かつ人格的要素を、「(非常に微妙な點に於て)」の検証から読み取ることができる。

② (袁愔は昔の青年李徴の自嘲癖を思出しながら、哀しく聞いてみた。)

これは、李徴の語りの中に語り手が入り込み、李徴の語りを聞いている袁愔の心中を解説した部分である。袁愔が「哀しく聞いてみた」ところの李徴の語りの箇所を、コンテキストに即してとらえれば、「自らを嘲るが如くに言つた」と語り手が語った後、すなわち、段落が改められて李徴の語りが示されている「羞しいことだが、今でも、こんなあさましい身と成り果てた今でも、己は、己の詩集が長安風流人士の机に置かれてゐる様を、夢に見ることがあるのだよ。岩窟の中に横たはつて見る夢にだよ。嗤つて呉れ。詩人に成りそこなつて虎になつた哀れな男を。」の部分にそれが該当する。つまり、青年時代の口調であった「自嘲」的な物言いで語られた、虎となつてもなお詩にこだわり続けずにはいられない李徴のやるせない思いを、李徴に同調して「哀しく聞いてみた」ことになる。ここでの袁愔の思いを、この後に李徴が語る「臆病な自尊心」「尊大な羞恥心」と結び付け、李徴は自己批判・自己否定をしてはいるものの、自省の不十分さゆえに結局は自嘲としてしか表せないものとして「哀しく聞いてみた」とする解釈は、コンテキストよりも物語内容の包括的理解を優先した読み方によるものである。

ここで注目すべきは、袁愔を、李徴の自嘲癖を気にする存在として描き出した、語り手による語りの仕掛けであろう。「自らを嘲るが如くに言つた」とまず初めに指摘したのは、語り手である。それに続いてほぼ直後に、語り手は李徴の語りの中に入り込み、「(袁愔は昔の青年李徴の自嘲癖を思出しながら、哀しく聞いてみた。)」と語っている。こうした、語り手と李徴とが交互に語るという『山月記』の語りの規則から逸脱した方法ではなく、()部分の後も継続する李徴の語りが済んだ後に、語り手の語る地の文として示すこともできたはずである。しかし語り手は、李徴の語りの中にあえて介入し、袁愔の実体験を提示することで、自らの指摘した李徴の自嘲癖を裏付けようとする。こうした語りの仕掛けにより、語り手は作中人物である袁愔を用いて自分の受け止め方を強調しているといえる。このように、()部分に着目し、その発言の主体と挿入の意義を考えることで、学習者は袁愔の人物造形が語り手によってなされていることを改めて

認識することになる。

③ (虎に還らねばならぬ時が)

この()部分について渥美氏は、『『酔ふ』という言葉は、虎を生きる李徴の感覚とするために、〈語り手〉は注釈者として李徴の中に入り込むのである⁽¹⁰⁾』と述べる。李徴の語りが中心となってからの語り手に対する「李徴を敗残者と見なすかのような冷やかな語り口は影を潜める」との見解と合わせるに、李徴の口にした「酔う」という言葉に対して語り手が単純に注釈を加えている、ということであろう。

田中・丹藤両氏ともに、「この小説の〈語り手〉とは、登場人物李徴に対する超越的視点がなく、逆に李徴という強烈な登場人物に吸収されているのである」(田中氏⁽¹¹⁾)、「〈語り手〉による主人公の相対化の視点は欠落」(丹藤氏⁽¹²⁾)とするだけで、この箇所についての直接的な言及はない。

松本氏は『『(虎に還らねばならぬ時が)』という括弧付きのことを全体の語り手の言葉と判断する場合には、この部分は描出表現として把握されることになるが、むしろ李徴の口調の変化を表示したものと見ることもできよう⁽¹³⁾』と述べる。「この部分」とは、『山月記』終盤の次の部分を指している。

最早、別れを告げねばならぬ。酔はねばならぬ時が、(虎に還らねばならぬ時が)近づいたから、と、李徴の声が言った。だが、お別れする前にもう一つ頼みがある。

この()を含む部分は、李徴の独白、すなわち発話そのまま記述されたものだ。発話の中に()で括られた部分が挿入される意味を考える。そもそも発話行為とは、時間軸に沿って一直線上に不可逆的に進むものであり、言いよどみや言い直し、補足説明をしようとも、それらを含めて一定の流れの中でしか成立しない。たとえば、李徴のこれまでの語りの中でも、派生的な話題に及んで「いや、そんなことはどうでもいい」としたり、それまでの内容を否定したりしながらも、発話は必ずひと続きの流れとして示され、言い直しに当たる部分に()が付されることはなかった。このことから、発話内に()で括られた部分が存在しうるとすれば、それは発話者とは別次元の存在によるものであり、この場合「(虎に還らねばならぬ時が)」と言葉を差し挟むことのできるのは、語り手であるといえる。

こうしたうえで、「(虎に還らねばならぬ時が)」の「還る」という言葉に注目する。李徴はそれまで、我が身について「人間の心が還ってくる」「人間に還る」として、自分が人間であることを前提にした表現で語るものの、「虎に還る」とは口にしていない。事柄としてニュートラルに表せば虎に「なる」のであるが、それを李徴は、「酔う」とし、その後の独白でも「自分が酔つてゐて故人を認めずに」として、たとえ虎の姿をしていても自分が性本来人間であるとの認識は一貫している。ここで改めて、「酔う」について語義的なレベルでの確認をすれば、酒であれ雰囲気であれ、「酔う」とは一時的な仮の姿であり心身が正常でない状態を指している。李徴が虎の精神性に支配された自らを「酔う」と表現し、一方で人語を話せる状態になることを「人間の心が還つて

くる」「人間に還る」と表現する所以はそこにある。すると、「酔はねばならぬ時が」という言葉には、自分の本来の状態は人間であり、虎として猛り狂うのは正常ではない仮の状態だ、しかし、自分の意に反してそうならねばならないのだ、との悲痛な思いが込められていることになる。ところが語り手は、この李徴の「酔はねばならぬ時が」という言葉に対してすぐさま追い打ちをかけるように、「(虎に還らねばならぬ時が)」との言葉を差し挟む。それは、語り手が李徴の認識を否定し、李徴にとっての本来の状態は虎であるのだと示していることになり、渥美氏のいう「注釈者」を超えた、痛烈な批評者の言葉となる。

このことは、語り手が物語の初めから一貫して、「叢中の聲は(語った)」「李徴の聲は(続ける)」というように、草むらで語る存在を「聲」と表現し、「聲」という言葉を外した「李徴」とは一度も示していないこととも呼応する。李徴自身が我が身を「異類の身」「あさましい姿」「我が醜悪な今の外形」と表現して外形のみが虎であると強調しているのに対し、語り手は物語の初めから李徴を声のみの存在として扱っているというこの対照からも、『山月記』の語り手の批評性が浮かび上がる。

そして、「(虎に還らねばならぬ時が)」の直後にも「と、李徴の聲が言つた。」という語り手の言葉が登場する。この部分について松本氏は、英文の直接話法の形のような前後双方に対する引用表示と捉え、「この段落において、それまでの告白の引用とは異なる形が用いられたのは、李徴の告白が終盤に至り、田中の言うところの境界部分(李徴の告白の始まりの部分)に照応する部分になるからであろう⁹⁰⁾」とする。しかし、田中氏の言う境界部分に照応するのは、次の部分ではないか。

さうして、附加へて言ふことに、袁儻が嶺南からの帰途には決して此の途を通らないで欲しい、其の時には自分が酔つていて故人を認めずに襲ひかかるかも知れないから。又、今別れてから、前方百歩の所にある、あの丘に上つたら、此方を振りかへつて見て貰ひ度い。自分は今の姿をもう一度お目に掛けよう。勇に誇らうとしてではない。我が醜悪な姿を示して、以て、再び此處を過ぎて自分に会はうとの気持を君に起させない為であると。

「袁儻が嶺南からの帰途には(中略)自分に会はうとの気持を君に起させない為である。」の部分が、語り手の「さうして、附加へて言ふことに、」という語り手と、引用表示である「と。」に挟まれて、李徴の語りそのものであるとも語り手による間接的引用であるとも読み取れるように語られている。これは、李徴と袁儻の再会場面での李徴の言葉が、李徴の語りとも語り手による間接的引用ともとれるのと同様である。

注目すべきは、「と、李徴の聲が言つた。」という部分が、ひと続きに語られたその末尾に付されているのではなく、李徴の語りの中に割り込んでいることである。これまで、()部分以外は、語り手の語り和李徴の独白とが段落によって区別され交互に示されるという規則性が保たれていた。ところが、この「と、李徴の聲が言つた。」の部分だけが、作中唯一の例外として語りの位相を超えてまでもここに介入しているのは、「(虎に還らねばならぬ時が)」という語り手の言葉が、先に確認したように痛烈な批評を意味するものだからである。これまで李徴に多くを語らせ

ながらも、折に触れて自己主張をしてきた語り手であるが、それが次第に高じて李徴の語りにも踏み込まずにはいられなくなり、その存在を明確に示して語るところに、人格的な語り手の意志が認められる。

そして、李徴の語りへ介入したこの部分を契機に、李徴の語る分量は急に少なくなる。逆にいえば、語り手が語りの主導権を握り、もはや李徴には多くを語らせなくなっているともいえる。そこに、物語世界の全体を統御する語り手の姿を把握することができよう。

語りの構造から見て、これら三箇所（ ）部分における共通性として確認されるのは、これらがすべて語り手による積極的介入としてとらえられるということだ。『山月記』の語り手は、作中人物の言葉にあえて割り込み、（ ）という形態として目立つ表記を用いて自らの姿を顕在化させて意見を主張したり、袁愔の存在を利用して自身の主張を強調したりする作為的な性質を備えている。この、作中人物の語る言葉や心中の言葉を途中で遮って語り手自身が意見を差し挟むという行為は、たとえば、一般に語り手が語ることを認められている地の文において作中人物を批評することに比べ、物語世界を統御する超越性において勝っているといえよう。語り手による物語行為に着目して読むならば、読者がこれまで単なる補足部分として看過してきた（ ）部分を、能動的かつ人格的な語り手の操作によって生じたものとして解釈することができる。

4. 透明な袁愔像の造形

物語世界から超越して主人公李徴を批評する人格的な存在としての語り手を認めるならば、その語り手が語り出している袁愔像も、改めてとらえ直す必要がある。

前田角藏氏は、「後で考へれば不思議だつたが」との叙述に表れているように『山月記』が「袁愔の体験談を袁愔に即して語るという〈方法〉を採用している。」として、袁愔について次のように指摘する²¹⁾。

袁愔の側から、〈「超自然の怪異」の物語〉が語られるというこの〈語り〉の構造は、必然的に物語の中での袁愔の位置を相対的に上げるという結果をもたらしたのであった。(中略) 李徴の〈語り〉に対して単なる聞き手としてではなく、必然的に〈主体性〉を保持した聞き手、すなわち批評的な聞き手となる。

「袁愔の体験談を袁愔に即して語るという〈方法〉」で語られていることを前提とした解釈であるため、「(非常に微妙な點に於て)」は袁愔の思いということになり、李徴の語りを聞く袁愔については、

一貫して見詰めているのは、李徴の詩の中に「欠け」ているものは何かということであり、昔と変わることはない「自嘲癖」であった。袁愔は李徴の〈語り〉に同化せず、主体的な判断力を持続している。

という把握となる。

この前田氏の解釈は、李徴の詩における不足の内容を分析しようとする袁愔像と、李徴の自嘲

癖を「主体的な判断力」でとらえる袁愔像とは、相互補完的な関係にあることを示している。つまり、「(非常に微妙な點に於て)」を袁愔の言葉ととると、李徴の詩の欠けるところを分析的・批評的にとらえようとするものとして解釈され、その直後の「自らを嘲るが如くに言つた」「袁愔は昔の青年李徴の自嘲癖を思出しながら、哀しく聞いてゐた」という語り手の語る部分に、その後李徴が語る「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」や、そうした自己批判が不十分であるがゆえの自嘲であるという批評的な解釈が遡及的に付加されるのだ。そして、李徴が妻子の保護について依頼した際に、「併し忽ち又先刻の自嘲的な調子に戻つて、言つた」という部分がさらに重ねられ、李徴の自嘲癖に対する批評性を備えた袁愔が導かれることになる。

しかし、前節「3. 能動的で人格的な語り手」の「②(袁愔は昔の青年李徴の自嘲癖を思出しながら、哀しく聞いてゐた。)」の項で指摘したように、「自らを嘲るが如くに言つた」として李徴の自嘲癖を予告したのは、語り手なのである。その後に「羞しいことだが」以下の李徴の語りが表示され、その語りの間に「(袁愔は昔の青年李徴の自嘲癖を思出しながら、哀しく聞いてゐた。)」と挿入されている。袁愔の思ひは「哀しく聞いてゐた」として示されるのみであり、自嘲癖を批評して「哀しく」思うのか、または李徴の語る「詩人に成りそこなつて虎になつた哀れな男」という言葉に同調して「哀しく」思うのかは、明示されていない。したがって、この部分から袁愔の批評性を認めるのは難しい。物語行為に着目するならば、袁愔の実体験や感慨を()を用いて李徴の語りに挿入することで、その性癖を強調しようとする語り手こそが、李徴の自嘲癖に対する批評性を備えていることになる。また、物語終盤には、妻子への計らいを依頼した後の李徴の慟哭に同調し、「袁も亦涙を泛べ、欣んで李徴の意に副ひ度ひ旨を答へた」とあり、別れに際して李徴が「堪へ得ざるが如き悲泣の声」を漏らした時に、「袁愔も幾度か叢を振返りながら、涙の中に出發した」ともある。前田説によるならば、「袁も亦」「袁愔も」として李徴の悲しみのままに同調するこの袁愔の姿をも「〈主体性〉を保持した」「批評的な聞き手」ととらえることになるだろうが、前田氏の論にはこの部分についての言及はなされていない。もちろん袁愔は、李徴をある程度において対象化する役割を果たしている。だが、そのことはすぐさま袁愔の批評性へと結びつくものではない。

袁愔は、『山月記』において李徴とともに名を与えられた二人の登場人物のうちの一人であるものの、作中においてその様子が語られる部分は少なく、大いに語る李徴と比肩するほどの存在ではない。そして作中で展開されるのも、二人の対話ではなく、ほぼ李徴の一方向的な独白である。袁愔の発話は、序盤の「其の聲は、我が友、李徴子ではないか？」だけが直接的に示されるものの、それ以降、その発話内容は語り手によって事柄として抽出されて間接的に伝えられ、読者がその姿を人格的な存在として把握することから遠ざけられている。そもそも袁愔は、冒頭部分に「温和な袁愔の性格が、峻峭な李徴の性情と衝突しなかつたため」に「友人の少なかつた李徴にとつては、最も親しい友」であつたと示されており、李徴を受容する存在として造形されている。なお、袁愔が李徴の詩に対して「缺ける所がある」との感想を抱く部分について、単なる受容にとどまらない批評性を見出すとしても、前節の①で指摘したように、袁愔は「何處か」という非

限定的な把握で「漠然と」「感じてみた」のであり、明確な批評性を持ち合わせてはいない。つまり、袁俊は、李徴の一方的な語りかけを受けて同調する存在、いわば、透明化したレセプターとして機能しているといえる。そして、このレセプターとしての機能は、物語の冒頭から、その存在は「一行」とともにあり、「袁俊はじめ一行は」「袁俊は部下に命じ」「袁俊はまた下吏に命じて」「人々はもはや、事の奇異を忘れ」（傍点引用者）として語られていることによって強化されている。これらは、高官である袁俊が「供回りの多勢」であったという、物語世界の設定上の情報を示すだけでなく、物語世界における袁俊の役割を表すものでもある。供の者は、袁俊とともに李徴の声に耳を傾け、袁俊の代わりとなって詩を書き留め、袁俊とともに李徴を嘆ずると語られる。つまり、李徴は袁俊一人に話しかけるが、それを受容する袁俊に伴う形で同様に一行は受容するのだ。李徴に袁俊が同調し、そしてすぐさま袁俊に一行が寄り添うという受容の動きが繰り返して語られるがゆえに、その動きは強化され、読者は次第にそこに引き寄せられて自らも連なって受容するという仕掛けになっている。そして、あたかもその場で李徴の語りを聞いているかのようにテキストを読み進め、それに圧倒されるのだ。読者は、李徴の語る衝撃的な内容に訴求力の根拠を求めるかもしれない。しかし、物語行為に着目すれば、巧みに袁俊像をコントロールし、同調する供の者を効果的に配することで読者を物語世界に誘うという、語り手による語りの仕掛けが関与した読みが生まれるのである。

5. まとめ

『山月記』を読んだ学習者の初発の感想には、「気付いてもどうにもならないのに気付いてしまった悲劇はつらい」「妻子への愛の不足など、李徴の人間性の欠如が、李徴が虎になった理由だと思う」「自分の中にも『臆病な自尊心』と『尊大な羞恥心』とがあるように感じさせられた」といった、李徴の語りの内容に関するものが多い。また、李徴の自嘲に注目して、李徴の自己否定・自己批判へのヒロイックな臭みや欺瞞性を指摘する学習者も少なくない。これらの感想はみな、テキストに示されている作中人物の「何が」気になったかを記したもので、すなわち、物語内容に関するものである。国語教室において、こうした物語内容に関する読みの差異を確認しても、それぞれの学習者の人間観の違いに起因する「多様な読み」として認めただけでは、「ナンデモアリ」²⁰となるだけで読みの位相は変わらない。自身の読みが何故にもたらされたのか、その根拠が物語行為にもあることに気付くこと、すなわち、自らの読み方をメタ認知することで、読みの深化がはかられる。

「1. はじめに」において、文学作品の教材価値を考えるうえで物語内容と物語行為とはともに欠かせない存在であると述べた。しかし、これらは等価のものとして並立しているのではなく、その関係性をとらえるならば、物語内容が中心にあり、その外縁部分を物語行為が取り巻いている二重の円のような構造とするのが適切であろう。物語行為のみにとどまって物語内容に到達しない読みはなく、読者は物語行為を通して物語内容に到達する。にもかかわらず、物語行為はその存在を意識されることが少なく、学習者の多くは物語内容にとどまってそれが文学テキストの

全てであると思ひ込む。読書経験の豊かでない学習者ほど、こうした傾向が見られよう。学習者が自身の読みの生じた所以をテキストの語り方に求める意識をもち、新たな読みの方略を身につければ、それは学習者の文学テキストの読み方への認識の変容のみにとどまらず、さらには、言語の行為性そのものに目を向けさせることとなる。文学テキストが先に示したような構造をもつのは、言語そのものが、語られることによってその内容を生じさせる存在であるからであろう。言語の行為性に自覚的であることは、言語生活者としての豊かさにつながる。物語行為に着目した文学教育の意義の一つが、ここにあるといえるのではないか。

注

- (1) 阿武泉監修『読んでおきたい名著案内 教科書掲載作品13000』（日外アソシエーツ 2008年4月）によれば、1951年に三省堂『高等国語 上』および二葉『新国語（六）』に初めて採録され、その後70年代にはすでに、採録する出版社がほぼ8割となっていた。
- (2) 丹藤博文氏は、教科書の文章末の「学習課題」「学習の手引き」などを検討し、「『山月記』の教材研究をするうえで驚かされるのは、その取扱い方の画一性である」とし、「ここでは李徴＝中島敦なのである。別言すれば、『山月記』の読みは、素朴な反映論に立っているのであって、李徴を中島敦という作家の伝記的事実にストレートに還元することで成り立っているといってもよい」と、その問題性を指摘する。
『『山月記』あるいは自己解体の行方』（『新しい作品論』へ、〈新しい教材論〉へ 3』右文書院 1999年6月）
- (3) たとえば、丹藤博文氏は、文学作品の教材研究のありかたについて、「ことばは相手に意味を伝達するばかりでなく、行為の遂行を促すという機能を持っている。文学作品もまた、文学体験という行為の遂行を読者に期待すると見て差支えない。したがって、作品が読者にいかなる行為を期待するのかについて仮説を立てることが肝要となる。その意味で、教材研究とは、作品の行為性を明らかにすることだといってよい。」（出典は(2)に同じ）と指摘する。
- (4) 田中実「〈自閉〉の彷徨—中島敦『山月記』—」（『日本文学』1994年5月 日本文学協会）
- (5) (2)に同じ。
- (6) たとえば、鎌田均氏は「この小説の場合、物語の〈語り手〉が李徴の〈語り〉に糾合され、一体化してゆくところに際だった特徴がある。」としている。（『〈語り〉を読む可能性—中島敦『山月記』』『国文学 解釈と鑑賞』2008年7月）
- (7) 前田角藏「自我幻想の裁き—『山月記』論—」（『国語と国文学』1993年10月）
- (8) 渥美孝子「中島敦『山月記』—外形と内心・語りの構図」（『新しい作品論』へ、〈新しい教材論〉へ 3』右文書院 1999年6月）
- (9) 三谷邦明「中島敦『山月記』の虚構構造—言説分析の視点から—」（『日本文学』1996年7月 日本文学協会）

- (10) 松本修『文学の読みと交流のナラトロジー』（東洋館出版社 2006年7月）
- (11) (10) に同じ。
- (12) (10) に同じ。
- (13) (4) に同じ。
- (14) (2) に同じ。
- (15) (10) に同じ。
- (16) (8) に同じ。
- (17) (4) に同じ。
- (18) (2) に同じ。
- (19) (10) に同じ。
- (20) (10) に同じ。
- (21) (7) に同じ。
- (22) 田中実氏が、「ああも読めるが、こうも読めるという〈他者〉のいない世界」における恣意的な自己主張としての読みが提示されたとし、「このナンデモアリは、人によって読みは違っているから、それぞれの読みが許されているという、〈エセ読みのアナキー〉を野放しにした」とする。（『小説の力—新しい作品論のために』大修館書店 1996年2月）

* 『山月記』の本文は、『中島敦全集 第一巻』（筑摩書房 1976年5月）による。